

## 平成29年3月NHK中央放送番組審議会

3月のNHK中央放送番組審議会は、13日(月)、NHK放送センターにおいて、12人の委員が出席して開かれた。

会議では、まず、これでわかった！世界のいま「偽ニュースが拡散中！なぜ世界はだまされる」について説明があり、放送番組一般も含めて活発に意見の交換を行った。

最後に、放送番組モニター報告と視聴者意向報告、4月の番組編成の説明が行われ、会議を終了した。

### (出席委員)

- |      |  |
|------|--|
| 委員長  | 北城恪太郎 (日本アイ・ビー・エム (株) 相談役)                         |
| 副委員長 | 大日向雅美 (恵泉女学園大学学長)                                  |
| 委員   | 秋池 玲子 (ボストン コンサルティング グループ シニア・パートナー&マネージング・ディレクター) |
|      | 大島 まり (東京大学大学院情報学環／生産技術研究所教授)                      |
|      | 鎌田 實 (諏訪中央病院名誉院長)                                  |
|      | 佐野真理子 (主婦連合会参与)                                    |
|      | 立野 純二 (朝日新聞社論説主幹代理)                                |
|      | 出口 治明 (ライフネット生命保険(株)代表取締役会長)                       |
|      | 西原浩一郎 (金属労協顧問)                                     |
|      | 藤村 厚夫 (スマートニュース (株) 執行役員メディア事業開発担当)                |
|      | 増田 雅己 (読売新聞東京本社常務取締役論説委員長)                         |
|      | 渡部 潤一 (国立天文台副台長)                                   |

### (主な発言)

<これでわかった！世界のいま「偽ニュースが拡散中！なぜ世界はだまされる」

(総合 2月26日(日)放送) について>

- 毎回、欠かさずに見ている。けれんみたっぷりにいろいろな演出に取り組んでいるところがおもしろく、井上裕貴アナウンサーをはじめ、先生役の解説者も含め、とても楽しそうに取り組んでいるのがよい。ニュースに携わっている方々は禁欲的というか、距離を感じるようなこともあるが、この番組はニュースをおもしろく掘り下げ、思い切ったスタンスで発言し、ゲストが突っ込んでいるのが最大の魅力だと思う。昨年アメリカ、今後のヨーロッパで起きうることを考えると、ニュース

に対する興味関心、リテラシーが低下すると、国を揺るがしかねないことにもなるだろう。NHKにとって、若い視聴者にどうアピールするかは最大の課題だと思うが、こうした番組を通じてニュースに興味を持ってもらう、楽しく見てもらうこと自体が、NHKでなければできないようなスタンスだと思う。若い視聴者、ニュースから遠ざかっている視聴者などに対して何ができるかという観点で、今後もこの番組に期待する。もっと磨き上げてもらいたい。

- 話題の国際ニュースを、テーマに沿って基本的なポイントを押さえながら、また出演者のテンポのよいやりとりを通じ、かみ砕いて分かりやすく伝えようという意図が伝わってくる。この放送時間帯で家族全員でというのは難しいかもしれないが、かなり幅広い年代の視聴者に見てもらえる、NHKらしいよい番組ではないか。今回はフェイクニュースという重いテーマを興味深く編集していた。フェイクニュースを発信する側の意図、その影響力の大きさと危険性、サイト運営者が進めつつある対策、国家が規制強化した場合の表現の自由との兼ね合い、個人が情報の虚実を判断する力をどう養うのかなど、ポイントを幅広くかつ分かりやすく伝えていたと思う。トランプ大統領のケースを見ても、既存メディアがフェイクニュースにどう向き合うのかは強く問われている状況だ。NHKとしてフェイクニュースにどう向き合うのか、その姿勢について番組の最後にでも触れてほしいと思った。フェイクニュースはソーシャルメディアだけではなく、もっと幅広いメディア全体の問題として番組は捉えていたので、そういう意味でもNHKのスタンスにひと言でも言及すべきではなかっただろうか。

“つぼ”を使った演出については必然性がよく分からず、あまり効果的ではなかったように思う。できるだけ分かりやすくするための工夫は引き続きお願いしたいが、過剰になることなく、よいバランスを保ち、真面目でおもしろい番組として続けてほしい。

#### (NHK側)

フェイクニュースに対して当事者として向き合っているという姿勢を表現すべきではないかという議論はしたが、結果的にうまく伝えることができなかった面があった。“つぼ”の演出について意見を頂いたが、演出については分かりやすく楽しく見てもらえるよう、失敗を恐れずいろいろなことにトライしている。この番組は生放送ということもあり、楽しみながら、ミスがあっても隠そうとせず、正直に伝えるべきことを伝えようという姿勢でやっている。また、よい意味での素人目線のようなことを大切にしている。先生役として出演

するNHKの職員は専門家だが、企画段階でさまざまな質問をぶつけ、その中で「その話は初めて聞いた」「その話はおもしろい」ということを見つけることが起点となっている。そのテーマについて全く詳しくない人に意見を聞いて、「この説明では分からない」というようなことをヒアリングする作業は、放送前のギリギリまで繰り返している。

- 国民を操り、国の進路も変えてしまいかねないフェイクニュースを、トランプ大統領の話題もうまく使い、とても分かりやすく説明していたと思う。日本での「原発事故は収束している」「状況はコントロールされている」というのも一種のフェイクニュースではないかと思った。「塩水を1リットル飲めばやせる」というフェイクニュースの例があったが、そのようなフェイクニュースは本当にたくさんある。何を信じればよいのか、どうすれば確かな情報を得られるのか、個人の努力だけでは難しい部分が多くあることも番組で示していた。だからこそ、報道機関の役割の重要性を改めて感じた。いま話題の“ポスト・トゥルース”ということばから問題を考えると、報道機関に期待されているのは真実の情報提供と言論であると思う。真実の情報提供には、その根拠となる証拠の確認・検証が求められるが、個人には難しいことであり、それを担うのが報道機関の使命であると思う。NHKがこのことの重要性を強く認識し、言論の機能を発揮することで、よりよい番組を作ってもらいたいとつくづく思った。NHKはこの問題に対してどう考えるのかが、ひと言でもあればなおよかった。
- 世界がどうなっているのかは、情報が多すぎるためにより分かりにくくなっている。自分のことで精いっぱいな人たちが増え、特に若い世代を中心に、広い視野で物事を見ようとしなくなってきたとすれば、日本は大変な危機になると思う。おかしなニュースで私たちの国の世論を二分するようなことが起きてしまったとき、あらゆる年代の人たちがきちんと考え判断する国であり続けるために、NHKには大事な使命があるのではないか。そういう意味で「これでわかった！世界のいま」は、難しいことを分かりやすく伝えることの重要さを含んでおり、価値があると思う。番組で語りきれなかったことは、「NHKスペシャル」などで展開することなどもできると思う。その時は厳しい視点で、多少難しくなっても視聴率を気にせず正しいことを伝えてほしいが、最初の入り口として「これでわかった！世界のいま」のように分かりやすい番組を作っておくことは、今後も大事ではないだろうか。
- 毎週見ているわけではないが、バラエティー感覚で楽しみながらニュースを解説

するという番組の趣旨はよく貫徹されているのではないか。特に若い人が見るにはよい番組だと感じる。ただ、分かりやすくということと、正確性との兼ね合いはいつも大きな課題となるだろう。今回の放送では気になる点はなかったが、そこは常に課題になると思うので、それこそフェイクニュースを生み出すことのないよう注意してほしい。既存のメディアとしてこの問題にどう対応するのかは重要な問題なので、NHKとしてどう対応しているのかについての言及があってもよかったと思う。SNSでフェイクニュースがなぜこんなにも広がっているかということ、アメリカなどでは若い人の多くが新聞、テレビではなく、SNSでしかニュースを見ないという状況になっていることも一因だ。日本でそうなることを防ぐためにはどうしたらよいのかという視点があってもよいかと思う。直接的に「NHKを見よう」「新聞を読もう」までは言わなくとも、そういう視点があってもよかったと思う。

(NHK側)

分かりやすさと正確さのせめぎ合いのようなところは、この番組で最も気を遣わなければいけない部分だという自覚は持っている。とは言え、あまり縮こまってもいけないので、放送前の打ち合わせでは自由に意見を出し合って、その後さまざまな視点から相互に検証している。最終的に専門分野のデスク、また別のデスクにも意見を聞き、ふさわしい答えを見つけ出す作業を毎回行っている。

- 日ごろからおもしろい番組だと思っているが、つい分からないままになってしまいがちなニュースの導入部分を教えるという意味で、とても意義がある番組だと感じた。また分かったつもりになっていることに改めて気づかされることもあるのもとてもよい点だと思った。NHKの国際部のデスク、解説委員が先生役として教えてくれるところに意味があり、また一つのニュースにこれだけの時間を使えるというのは、ぜいたくな番組なのだろう。一方で、ぜいたくな小道具などの活用も含め、説明に多少の過剰感があるかもしれない。日曜の夕方に見る分にはこのぐらいのスピード感がよいのかもしれないが、視聴者の反応なども見て、適切なスピード感にする工夫をするとよいかと思った。

「サキどり」と多少似ているような気がしたが、番組のすみ分けはどのようにしているのか。

(NHK側)

「サキどり」は主に経済をテーマにした話題を取り上げている。取材対象は国内が中心だ。たまたま「サキどり」で国

際的な事柄を扱うことはあるかもしれないが、あまり重なることはないのではないかと思います。

○ 日曜の夕方に、きちんとしたテーマを気楽に見られるという面で、この番組をきっかけに議論が生まれるようなことになればよいと思う。“つぼ”の演出くらいはユーモアがあってよいのではないかと思った。全体としてはよい番組だったと思う。3点ほど申し上げると、まず、フェイクニュースは昔からある。丁寧に説明をしていたので誤解はないと思うが、粗っぽく見るとフェイクニュースはSNSとかなり密接な関係があるのではないかという錯覚を一部の人が持ったかもしれない。SNSが増幅させている点はあるが、間違ったニュースを流すことで政治、経済を変えようとするのは昔からあったので、その点は気になった。次に、日本はマスメディアの信頼度が7割程度だが、アメリカは2割程度だという。そうした両国の社会性の違いもある気がした。そして、SNSを単に怖いものとするのではなく、フェイクニュースがあふれているSNSの中で、フェイクニュースかどうかをいかに判断するのか、どのように対応したらよいのかという視点も大事だと思う。個人にとってはすごく難しいことだが、相互に検証可能なデータ、ファクトを使い、議論することが普通の考え方かと思う。伝統的な視点だが、相互の検証性がすごく大事だと思う。そういう考えも紹介してもらえるとよかった。

○ 子どもと一緒に見た。授業形式の楽しい形で、比較的シリアスなフェイクニュースというテーマを取り上げていた。フェイクニュースとは何なのか、どういう影響を社会的に与えるかということ子どもなりに考えていた。“つぼ”に絡んだ“おやじギャグ”もあり、子どもはそこで楽しく笑っていたので、ある意味では効果的だったのではないかと思う。ニュースとは何かという根本的な問題と、ニュースにはうそもあるということは、実感として分からなかったようだが、そういうことも含め、親子で話し合い、考えた。スマートフォンなどを介してSNSなどのいろいろな形で情報が子どもたちに入ってくるときにどう対応していくべきかということも考えさせられる番組だった。

2時限目に取り扱ったピョンチャンオリンピックに向けた韓国のニュースも大事な問題だったと思うが、盛り込みすぎの印象を受けた。フェイクニュースの項目の印象が少し薄れてしまった感じがした。32分の番組なので一つの話題をいろいろな視点で取り上げることもできるのではないかと思う。最後のトラ園をドローンで撮った映像も迫力があってよかったが、盛りだくさんに感じた。一つの話題を掘り下げる形でも興味を持って見てもらえるのではないか。

(NHK側)

毎回の演出方法は、中身の筋をひととおり決めてから考えている。演出に中身が引っ張られることがないようにしている。小道具はあくまでも小道具として、楽しみの一つの材料として考えようと思う。内容が盛りだくさんすぎるという指摘については、自覚している。4月以降は放送時間が5分間延び、37分の番組になる。それは番組にとってよいことだと思う。その5分間は、情報を足すというよりは、もっと質問の時間を増やすなど、ゆったり深く見せられたらよいと考えている。

- 「バラエティー感覚で分かるニュース」ということで、気軽な気持ちで、あえてリラックスした気持ちで視聴した。出演者の坂下さんのコメントは、自分が思っていることとほぼ同じだった。NHKのニュースは頭のいい人が見るものという印象があるが、解説者の言葉もとても分かりやすかった。解説者はたくさんの小道具を使って説明し、アナログ感を残すことで、ニュースの堅さを緩めており、よいと思った。やや気になったのは、実際のニュース映像と、刺激的なアニメーションによる映像、またピョンチャンオリンピックについてのパートでは記者レポートの映像が使われるなど、視覚的に統一感が薄かったような気がした。番組に対し最初に感じたイメージは「学校」だったので、VTRやアニメーションなどのナレーションは解説者やアナウンサーの声のほうが統一感が出るのではないかと思った。最終的にはとても分かりやすくニュースを教えてもらったという印象を持った。これからもチェックしていきたい。
- 大きな恐怖を感じた。こうした事実があること、すなわち、公然と嘘をつかれそれが拡散し真実味を帯びること、金目当てで実行する者がいること、意図的に大きな力がこうした情報操作を手掛けることがあることを、分かりやすく伝えるという意味で、意義ある番組だと感じた。多くの方が、「気をつけよう」と思っただろう。名をつけることは存在を認めることにもつながりかねず、フェイクニュースという言葉が日常使用されるようになっていくことを危惧した。ただ「嘘」と言えばよいと感じる。どうすればよいかについて、最後にやりとりがあったが、もう少しここを充実すべきだと感じた。個々人や親世代が気をつけるべきこと、情報リテラシーの向上策を具体的に提起してほしい。
- 幅広い年齢層の方を対象に、世界的にホットなテーマを分かりやすく伝えるという点で目的を達したすばらしい番組だと興味深く見た。見ていて違和感のあったこ

としては、先生役が男性で、生徒役の2人が若い女性だったことだ。誰にでも分かりやすくという意味もあり、生徒役の2人の質問はどちらかという生徒役に徹したため、易しく幼稚っぽいところもあった。ほかの回では生徒役に男性、先生役に女性などの回もあることは確認できたが、たまたま今回だけを見た子どもにとっては、教えてくれるのが男の人で、大人なのに幼稚っぽいことを聞くのが女の人というシチュエーションとなっていて、それは番組の印象を悪くしかねず、もったいないと感じた。生徒役は男性と女性を混ぜる、先生役に女性も入れるなどしてほしい。

- フェイクニュースに関して的確にいろいろなことを取材しており、内容はよかったと思う。1時限目と2時限目の切り替えがあることについては、学校の授業風でおもしろく見えるので、私はよいと思う。フェイクニュースかどうかは、ニュースの出し手が誰なのかをよく考えないと判断できない。日本ではテレビ、新聞がニュースの出し手として信頼のおけるところで、そうではない人が出したものの中に、信頼のおけないニュースがあるかもしれない。そのあたりのことはもっと言ってもよかったと思う。坂下千里子さんは奇をてらわずに思ったことを何でも質問し、番組をおもしろくしていてよいキャラクターだと思った。もう1人のゲストは男性でもよいかもしれない。男性でも知ったかぶりで質問をされると番組がおもしろくなくなるので、純真に質問する生徒らしい男性を選ぶか、先生役に女性がいる、という配慮はときどきあってもよいかもしれない。

#### (NHK側)

先生役はどうしても男性に偏りがちだ。国際部のデスクにも女性が増えてきているが、テーマによってはなかなか合わないということがある。一方、ゲストは老若男女、いろいろな方を招いている。委員からの意見を受けて、ステレオタイプを生まないように気をつけなければいけないと認識した。今回のフェイクニュースは難易度が高いテーマだったと感じる。フェイクニュースをずっと専門にしている記者はいない。先生役だった記者はニューヨークでメディアの取材もしていたので、勉強しながら担当してもらった。フェイクニュース、SNSというような話題を、子どもからお年寄りまで伝える時に、お年寄りにはその説明では分からないということもあるし、子どもにはまどろっこしいのではないかということもあり、悩ましいテーマだった。これからもかみ砕き、分かりやすくということにこだわりながら、幅広い年代の方に向け、

さまざまなニュースを見る入り口のような位置づけの番組にできればと改めて思った。

フェイクニュースについてのNHKの考え方が出ていなかったという意見を頂いた。われわれもフェイクニュースの背景には何があるのかといろいろ考えている。全体として若者を中心とした既存のニュース離れがある。さらに既存のメディアが政治情勢や世の中の動きをつかみにくくなっていることがある。また世論形成におけるメディアの影響力の低下もある。そういったことが複合的にあり、それがアメリカ大統領選挙の報道などに表れていたのではないかと考える。日本の既存の大手メディアにとってもひと事ではなく、われわれにとっても直面する一つの危機であると考えている。フェイクニュースがなぜ出てきて影響力を持つのか、SNSの普及から既存のメディアの問題も含め、多くの問題を抱えていると思う。「これでわかった！世界のいま」は、ともすれば関心の薄れがちな国際ニュースを分かりやすくかみ砕き伝えることを目的にしている。多くの委員に指摘いただいたようにこれからもさまざまな形でこの問題を取り上げ、深く掘り下げていく。

#### <放送番組一般について>

- 2月22日(水)に放送したガッテン！「最新報告！血糖値を下げるデルタパワーの謎」について。「ガッテン！」は長い歴史があり、おもしろい番組だと思う。論文の調査もよく行っており、番組に根拠を持たせようとしていると思うが、どこか視聴率を上げようとするねらいが強まりすぎているように思う。制作者側は娯楽番組として楽しんでもらえればよいと思っているのかも知れないが、あっと驚かせるようなキャッチーなフレーズで引っ張るような感じがあるように思う。テレビが持っている力は大きい。健康法は20年間、毎週新しいものを見つけ続けることなど本来は難しいことだ。マンネリになるかもしれないが、ときどきは原点に戻り、シンプルな話を根拠のある形でやってもらいたいと思う。こういうことを守るとよい、運動がよい、野菜を食べるとよいなど、みんなが分かっていることを改めて紹介することも含め、奇をてらうだけではない、原点に復帰する企画も織り交ぜつつ、やはりNHKというような、民放のただおもしろい健康番組とは違うところを見せ



てもらえるとよいと思う。

- この番組への反響に対するNHKの対策、対応は適切だと思う。この問題は最先端科学研究を番組で扱うことの危うさにある。最先端の研究を評価が定まらないうちに紹介する際、十分に調査しているとは思いますが、少し行きすぎた表現になることもある。サイエンスのおもしろさを語る時、正しさをどれだけ犠牲にし、分かりやすく表現するかという点において、そのバランスに気をつけないと今回のようなことになる。それは先ほどの指摘につながるのだと思う。リスク担当のプロデューサーを置くことで、客観的な目でチェックをし、よい番組にすることを望む。
- 翌週の放送で行きすぎた伝え方についておわびしたことはよかったと思う。以前の「ためしてガッテン」の時から、健康だけではなく、いろいろなことを取り上げ、なかなか思いつかないこと、例えば「バナナはどうすれば黒くならないか」など、いろいろな切り口でたいへんおもしろく見ている。最近は話題が少なくなってきたのかもしれない。難しいテーマを取り上げること、無理な実験をするようなことはしなくてもよいのではないかと思う。淡々と事実を紹介するだけでも、多くの人にとって参考になる番組だ。信頼感を大事にし、奇をてらわず番組を作ったほうが多くの人に安心して見てもらえるのではないか。これからもよい番組を作ってもらいたい。多くの視聴者のいる番組だけに、批判を呼ぶような無理な構成にしなくてもよいのではないかという気がした。

(NHK側)

「ためしてガッテン」からの基本精神は、見ていただく方に幸せになってほしいということだ。番組の原点に立ち返り、精査したいと思う。論文の選び方でも、評価が定まらないものに手を出し始めたところもあったかもしれない。どのような形でどこまで紹介するのか、厳しく見るようにする。意見をありがたく思う。

- 前回報告のあった「STAP細胞報道に対する申立て」に関するBPO決定とNHKの対応について。小保方晴子さんが主張する人権侵害が番組にあったかどうかについて、番組ではことばが注意深く選ばれており、小保方さんが故意に不正を犯したかのような内容にはなっていないと感じた。なぜあのような研究結果となってしまったのかという、事実に基づいた問題提起だと思う。なぜあのような論文になったのかという疑問はますます湧いてきたが、小保方さんの故意の不正などを結論づけているものとは思えなかった。これだけの調査報道なのに小保方さんのコメント

をなぜとれなかったのかとは思った。強引な取材について、NHKとしてきちんと謝罪し、再発防止に努めるということなので、それはそうしてもらいたい。NHKほどの組織であっても、コメントをもらうための適正な方法、ノウハウの蓄積が本当になかったのかと疑問に思ったし、残念にも思った。今後のBPOとのやりとりは何かの機会に報告してほしいと思う。

- 3月11日(土)に放送したNHKスペシャル シリーズ東日本大震災「“仮設6年”は問いかける～巨大災害に備えるために～」(総合 後8:00～8:45)と「避難指示“一斉解除”～福島でいま何が～」(総合 後9:00～9:49)を見た。どちらも秀作だと思った。とりわけ「“仮設6年”は問いかける～巨大災害に備えるために～」は自治体関係者に数多くのアンケートを取り、今の法律が被災者のニーズに合った住宅作りを阻害している現実をあぶり出していた。考えさせられるよいテーマだったと思う。「避難指示“一斉解除”～福島でいま何が～」は放射能災害がいかにして地域のコミュニティを分断していったのかという重大なテーマを扱っており、3.11から今もなお引きずる問題を描き出すうえでたいへんよい番組だった。その上で、いずれの番組も、今の状況を生み出している中央の取り組み、考えに対する切り込みが弱いと思った。「避難指示“一斉解除”～福島でいま何が～」は、避難区域解除ありきで国が進めるために、村が翻弄され分断されていく様子は痛々しいほどまでに分かったが、なぜ国はそうまでして避難区域をいま解除しようとするのかという分析が足りなかった。「“仮設6年”は問いかける～巨大災害に備えるために～」では、問題となっている法律に関して、代表して話をしたのが内閣府参事官だった。内閣府参事官1人にこの問題を語らせるのは限界があったと思う。ところどころで答えになっていないようなところもあった。「その問題はわれわれも知っているが、東日本大震災の問題が終わった後に総括しようと思う」という、誰が聞いても到底納得できないコメントを引き出したことは成果だったが、なぜそれに取り組まないのかという答えは得られなかった。何よりも政・官・民という問題のありようを考えたときに、民の問題は描かれ、官の問題は参事官で代表されたが、法律の問題であるならば立法府である政治はなぜこの問題に取り組まないのかという切り込みはほとんどゼロだったように思う。大変優れた、時間と手間をかけたテーマだったので惜しい気がした。

(NHK側)

NHKスペシャル「“仮設6年”は問いかける～巨大災害に備えるために～」でなぜ内閣府の方に取材したかという、問題となっている災害救助法の直接の担当窓口であり、ディテールの話も含め、問題提起として有意義な話ができるので

はないかということをお願いした。頂いた意見のように政治家の声もきちんと聞いたほうがよいのではないかという視聴者の意見もあり、今後の取材の参考にしたい。

NHKスペシャル「避難指示“一斉解除”～福島でいま何が～」については、今回は避難指示区域の7割が解除されるという、大きな節目であり、避難指示解除が住民の帰還につながっていないことは、これまでほかのニュースや番組でも伝えてきた。飯舘村は東日本大震災直後からずっと取材をしており、村として村民の帰還を促す取り組みを進めてきたところだったので、その中でどのような問題を抱えていたのかという現場の目線を中心に取上げた。国の政策に翻弄され、分断が進んでいくところもあった。今回は現場で何が起きているのかを中心に伝えたが、放射能で汚染されたところを立入禁止区域にするのではなく、除染し、人を戻すという世界で初めての試みについて、今後も継続して検証していく。意見は参考にさせていただく。

- 3.11前後に、大型番組だけではなく、ニュース番組、さまざまな形で福島県、被災地をNHKが取り上げたことに感謝したい。復興大臣のインタビューはないのかという思いを持った番組があった。そのあたりはフォローしていただければと思う。
- 3月12日(日)のNHKスペシャル メルトダウンFile. 6「原子炉冷却12日間の深層～見過ごされた“危機”～」を見た。福島第一原子力発電所と東京電力本店、新潟の柏崎刈羽原子力発電所を結んだテレビ会議があった。検証可能な膨大なデータがあるわけだが、素人では解析できないようなデータを専門家が丁寧に分析していた。危機的な状況下で現場にいる人の疲労感のようなものが係数、数字、データできちんと出ていた。新潟からは直接の当事者ではないだけに客観的にいろいろなことが見えていた。事故の総括だけではなく、これからいろいろなことが起こる組織のマネジメント論としても秀逸な番組であると感じた。結論でも、専門家の方が教訓として、横からいろいろなことを冷静に見られる人を置いておくことを薦めていた。単に原発事故を総括するだけではなく、何かが起こったときの組織のあり方という面でもすばらしい番組だと思った。また初動の怖さも感じた。不謹慎だが、1号機はもっと大変な事態になっていたかもしれないと、いろいろなことを考えさせられた。

(NHK側)

福島第一原子力発電所の事故について、たとえほかの局が追わなくなっても、NHKは諦めずに新しい事実を発見しようと思って取り組んでいる。その中で本当はどこが問題だったのか、緊急冷却装置の動作試験など本来やるべきことができていなかったのではないかと、ということが指摘できたと思う。これからも続けていく。

- NHKスペシャル「原子炉冷却 12日間の深層～見過ごされた“危機”～」は、緊迫した状況の中で何が起こっていたのか、多くの人々の意見を集約し、どの時点で何が起きていたのかをよくまとめていた。なぜイソコンの実試験をしていなかったのかということ、1人の人間に集中すると体力がもたず判断も不十分になること、誰が指示し誰が検証するかというような体制づくりが必要であることなど、さまざまな問題を提起していた。ただ、今の原子力発電所の運転の中でそうした課題が反映されているのかについては、これから引き続き取材をしてほしい。せっかくあれだけの分析をしたので、それが実社会の中でうまく利用されているかどうかという検証もフォローアップしてもらいたい。ここまで分析したものは初めて見た。緊迫した状況で人は何をするのかについて重要な示唆もあり、組織対応の重要性も考えさせられた。今は組織対応がきちんと改善されているのかがよく分からなかったもので、これからの取材に期待したい。
- 3月8日(水)のクローズアップ現代+「震災6年 埋もれていた子どもたちの声～“原発避難いじめ”の実態～」はよい番組だった。大学とNHKが共同でアンケートを取る試みは以前にもあったのだろうか。

(NHK側)

「NHKスペシャル」で、震災4年のタイミングで、避難生活者1万人のアンケートを大学と共同でやったことはあった。

- 大学と共同でアンケート調査をすることは意義深いと思った。大学などでのアンケート調査は、学術目的だけで終わってしまいがちだが、調査に基づき、何が起こったのかをメディアを通じて発信することは意義があったのではないと思う。震災をきっかけに苦渋の決断で故郷を離れたにもかかわらず、避難先でひどいいじめに遭ってしまう。それは社会的な問題でもある。番組ではそういう現状があることを取り上げていた。岐阜県の小学校の生徒たちが、横浜でいじめに遭った生徒を応援

するメッセージカードを送り、それで生きる希望が湧いたという。未来につながるという意味でもよかったと思う。アンケート調査で関わった早稲田大学の辻内琢也教授と、法政大学の尾木直樹教授が出演しており、コメントも的確でよかった。教育現場においては格差が広がっていて、弱者が弱者をいじめる構図があるという。シリアスな実情が分かりやすく伝わったのではないかな。

番組が終わってすぐに次のドラマに切り替わり、殺人現場で屋上のタンクに死体が浮かんでいるシーンが急に出てきた。こうしたテーマの番組の直後にそうしたショッキングな映像が出てきたことは残念だった。

- 番組のつながりは難しいと思う。前の番組の余韻が残っているうちに次の番組が始まってしまう。
- 3月11日(土)には4つの映像波で15時間ぐらいの関連番組を放送し、ラジオでも多く放送していた。NHKならではだった。3月4日(土)の「バスで！列車で！篠山輝信×震災6年の東北旅」(BSプレミアム 後5:30~6:59)のように、被災地の観光を支援するような番組もあった。だんだん風化していくのかもしれないが、NHKは忘れないようにやり続けることが、東北の人たちにとっても大事なのではないかなと思う。
- 東日本大震災関連の番組については、NHKという報道機関があっただけで本当によかったと思った幾日かだった。政府の中枢の方のコメントを盛り込んだらよいのではないかなという意見もあったが、私もそういう思いで見つつも、社会、あるいは政府の中枢において震災が風化しつつある中、エビデンスでこれだけ迫るプレッシャーはすごいと思った。なまじ政府の関係者に弁明させるよりも、はるかにインパクトのある番組が多くあるという思いも、一方であった。3月11日、12日の2日間に集中的に編成していたが、よい番組があってもどれだけの方が見られたのだろうかと思う。そう考えたときに「NHKニュース おはよう日本」で、東北出身の阿部渉アナウンサーが、6年間継続して被災地から1週間続けて中継をされていて、いろいろな思いを伝えてくれたことはとてもありがたいと思った。そのように、1日2日ではなく、もう少し長いスパンで、多くの人たちが見られるような配慮もしてもらえたらと思う。6年ぐらいでは一定の節目ではない、風化させてはいけないということNHKの番組が力強く訴えてくれたことに感謝している。
- 東日本大震災から6年ということでNHKは多くの番組を放送しており、そのほとんどを視聴した。各番組でテーマ、捉え方が違っており、NHKらしく、NHKならではの番組だと強く感じた。

3月5日(日)のNHKスペシャル「あの日 引き波が…行方不明者2556人」は、強い引き波の場面をとらえ、被災者1人1人がカメラの前に立ち発言していた。初めて語った方も多かった。NHKの記者が被災地で信頼関係をきちんと作っていることに感心した。

また3月10日(金)のNHKスペシャル「15歳、故郷への旅～福島の子どもたちの一時帰宅～」(総合 後10:00～10:50)については、子どもたちは一番の犠牲者であり、環境の変化が心にどう影響を与えているのかという気持ちで見た。故郷に帰り、強く生きようという気持ちが強くなったことに、ほろりとした。

3月11日(土)のNHKスペシャル「避難指示“一斉解除”～福島でいま何が～」では、復興を急ぐ飯舘村の村長と村民の意見の違いがそれほどまでにあるのか、これが原発事故なのかと改めて思わされた。高い放射線量の中でどうやって生きていくのか、早い復興とはこういうことなのか、あまりにもひどすぎるし、誰のための復興なのかと思った。福島出身の議員の意見を聞きたかった。子どもたちのためにと学校を整備しているが、放射線への不安から、村民たちが苦悩を抱えていることがよく分かった。この部分はもう少し掘り下げてほしかった。もはや被災地の回復は不可能だと言っていた方もいたが、ある意味でその通りではないかと思わされた。

どの番組も被災者、関係者の声を紹介しており、重要なメッセージ性のある番組だった。とても衝撃を受けた。これからも続けてもらいたい。NHKしか追っていないのであればなおさらのこと、その姿勢を続けてもらいたい。その土地の議員や行政の方たちの意見を表明する場面も作ってもらえたらと思う。

なお、NHKスペシャル「避難指示“一斉解除”～福島でいま何が～」の放送のときに地震が起きた。地震のテロップが出たが、画面に出ていたグラフにテロップが重なり見えなくなった。テロップを横ではなく縦にするなど、位置を替えられないものかと思った。

(NHK側)

NHKスペシャル「あの日 引き波が…行方不明者2556人」では、初めて取材に応じてくれた方々がいた。今までの検証の中で引き波の危険性があまり言われていなかったのも、新たな教訓が自分の証言によって浮き彫りになればという方もいた。番組の最後にメッセージとして被災者の声を並べたが、何よりも被災者はとにかく忘れてほしくないという思いが強く、取材に応じてくれた方が多かった。そうした方々の志を大事にし、これからも番組を続けていきたい。

NHKスペシャル「15歳、故郷への旅～福島の子どもたちの一時帰宅～」については、避難指示地域の子どもたちの

半数が、15歳になると一時的に故郷に戻るということで、それが一種の通過儀礼のような形になっている。そこで彼らが何を見て何を感じるのだろうと、フラットな気持ちで取材を始めた。そのときに感じたことだけではなく、6年間どう生きてきたかということをも改めて彼らが振り返り、これからどう生きるのかというようなことを15歳なりに考えている、そういうところまで描きたかった。その意図は通じたようで、大変うれしく思う。

- 東日本大震災関連番組は「NHKスペシャル」を中心に多くの番組を視聴した。政府の立場、担当行政の立場からの発言、国として問題をどう受け止めるのかということもきちんと報道してもらいたかったという思いが強い。NHKには、東日本大震災、原発事故がもたらした過酷な現実を改めて振り返ること、今日までの復旧・復興の過程を常に調査し検証するということが公共放送として問われ続けるだろうと思う。仮設住宅の問題、避難指示の一斉解除の問題、原発のメルトダウンの対応の問題など、日本が先へ進む際に国民がきちんと考えなければならない深刻な問題がきちんと発信されてはいるが、国内的な論議をどう起こすのかについてもNHKには考えてもらいたい。今からでは遅いかもかもしれないが、番組を通し、論議や対話の中で次の道がもう少し見えるような取り組みをお願いしたい。原発いじめに関するさまざまな報道番組も含め、NHKが被災地、被災者に寄り添った取材を継続し、多面的に取り扱ってきたからこそ番組にできたのだと思う。映像の世界でそれができるのはNHKしかないと思うので、検証と問題提起も含め、その役割を果たしてもらえたらと切に願う。

(NHK側)

3月11日(土)は午前と午後に長時間の生放送をした。これまで、被災地の厳しい現実を中心に伝えてきた。6年たった今も厳しい現実是不変だが、被災地とそれ以外の地域との結びつき、そこで起きた復興への新しい具体的な取り組みなどを今年は今までよりも強く押し出したと自負している。7年目以降も被災地に役立ち、被災地とほかの地域を結びつけるような番組を作りたいと思っている。

今回の東日本大震災の報道についてさまざまな評価を頂き、ありがたく思う。私たちは震災から6年のこの報道がこれらにつながると思う。6年たってから新たに出てきた

問題もさまざまあり、東日本大震災の記憶、反省を風化させないように報道を続けていく。被災地では記者、ディレクター、カメラマンなど、それぞれの取材者が地域の人たちとともに考え、悩み、解決策を見いだす中でさまざまな番組、企画を作るという姿勢で臨んでいる。今回の番組、企画もそういう中から出てきたものと考えている。なぜこういう政策が出てきているのか、政策が意図するものは何なのかということをもさらに深く掘り下げることで、今後の打開策、解決策を見いだすような報道を続けたい。

- 3月4日(土)のE T V特集「小野田元少尉の帰還 極秘文書が語る日比外交」を見た。NHKならではのドキュメントだと思った。残留日本兵として現地の人たちを何十人と殺害せざるをえなかった状況を伝え、現地の人から憎悪のことばも引き出しつつ、日本とフィリピンの水面下の外交を鮮明に描いていた。こういうものはあまり見る機会がなかったが、さすがのNHKの取材力で、よくここまでと思った。小野田寛郎元少尉に限らず、文書がどんどん出てくる時代になれば、いろいろなテーマで作れると思う。こういう番組を続けて制作してもらいたい。
- 2月26日(日)のBS1スペシャル「ただ涙を流すのではなく“分断する世界”とアウシュビッツ」(BS1 後8:00~8:49)を見た。アウシュビッツ博物館公式ガイドに1人だけ日本人がいて、その方がアウシュビッツの現状を見て、涙を流すのではなく、考えてほしいと言いつけている。そこから自分なりに、未来を見るということはどういうことなのかを考えた。アウシュビッツの問題については、アメリカの心理学者のスタンレー・ミルグラムの“アイヒマン実験”があるが、一人一人がきちんと考えないから、アドルフ・アイヒマンのような人が現れ「ヒトラーがきっとそう思っているだろう」という思いで何百万人も犠牲になったのだ。フェイクニュースがまん延する時、考えない国民がどんどん増えていけば、私たちの国も危ない状況になる。その土俵際のところでNHKがきちんとしたメッセージを出し続けることはすごく大事なことはないか。この番組では、こじつけることなく、自然とそういうことを予見させるヒントを与えていた。考えることを通し、何をすればよいのかということが見えてくればよいと思った。とてもすばらしい番組だった。
- BS1の「地球タクシー」という番組は好きなシリーズだ。たまたまロンドンとプラハの回が放送されていて、両方ともタクシーで市内を走った経験があったのでおもしろかった。出演するタクシードライバーは、皆さん市井の人なのだが、哲学者のように街のこと、世界のこと、民族のことを語り、スタッフがすばらしい会話



を引き出している。その重みと深みと景色に魅惑される。そういう制作スタッフのいるNHKはすばらしいと思う。

- 「ぼくらはマンガで強くなった」を見た。2月14日(火)にボクシング(総合 後 11:00~11:15)、3月10日(金)にバレエ(B S 1 後 11:00~11:49)を取り上げていた。それぞれをテーマにした漫画と、その読者であり第一線で活躍する村田諒太さんと上野水香さんがそれぞれ出演していた。漫画を読んで励まされ、勉強にもなったという。取り上げられた漫画はインパクトがあった。バレエは山岸涼子さんの作品で、解剖学的な要素を含んでいる。上野さんと漫画の関係以外に、その漫画自体も漫画史の中でインパクトを持った作品であり、次の世代の漫画家にも影響を与えているということが分かった。山岸さんの作品は、当時アシスタントだった槇村さとるさんの作品にもつながっており、槇村さんも大成された。伏線の存在が、番組の構成としてとてもおもしろいと思った。
  
- 3月3日(金)の朝に新日本風土記「堺」の再放送をたまたま見た。堺の黄金時代の状況、古文書などに興味があり、勉強にもなった。番組で、仁徳天皇陵ということばを使っていた。間違いではないし、堺市のホームページでも確かそう書いてあるが、学者の論文を読む限りでは、仁徳天皇陵であることはかなり怪しいというのが通説で、学問の世界では大仙陵古墳、大仙古墳が一般的だ。仁徳天皇陵だけで本当によいのだろうか。

(NHK側)

仁徳天皇陵については制作者も承知しており、考古学的に仁徳天皇陵古墳の被葬者が仁徳天皇であるかは疑問視されているが、地元の人にも親しまれている呼び名ということで仁徳天皇陵古墳を使用し、考古学で用いられる大仙古墳も併記した。

NHK編成局  
番組審議会事務局